

『東日本大震災 緊急報告会 地域の復興と湿地』

去る3月11日、東日本太平洋沿岸では大地震と津波により甚大な被害を受けました。沿岸全域で街全体が瓦礫の山となるほど破壊されてしまいました。さらに、福島原発の事故では放射能放出が長期間に及ぶことが予想され、広範囲にわたる農漁業への影響が心配されています。このような時こそ、「湿地を保全することを通じて持続可能な社会の構築に貢献する」というラムサール条約の目的の真価が問われます。

緊急集会では、宮城県栗原市・大崎市、福島県相馬市、栃木県など、北関東～東北の地域NGO代表などが各地の被害状況を報告し、将来について会場と意見交換します。さらに、ラムネットJがGEOCの協力を得て全国から集めた被災地への緊急支援物資を現地関係者に贈呈し、搬送を手伝うことにしています。

私たちはこの震災で多数の仲間と湿地を失ってしまいました。その犠牲に報いるためにも、地域の人々が安心して健康に暮らせる持続可能な社会を構築していくための第一歩を力強くここに踏み出し、湿地保全のウェーブを広げて、水辺のいのちと暮らしを守っていきます。

《 緊急集会 》

『東日本大震災 緊急報告会 地域の復興と湿地』

日時：4月30日（土） 10：30～13：00

場所：国連大学内 GEOC セミナールーム <http://www.geoc.jp/intro/access.html>

主催：ラムネット J 水田部会 後援：日本野鳥の会・WWF ジャパン・日本自然保護協会・CBD市民ネット

協力：地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）

問い合わせ：安藤（090-5330-9456） 参加申し込み：不要 参加費：無料（カンパにご協力ください）

《 プログラム 》

1. 挨拶 柏木 実さん(ラムネットJ共同代表)

2. 各地報告 10：35～11：35

- ① 宮城県栗原市 呉地正行さん（ラムネットJ共同代表・日本雁を保護する会）
- ② 宮城県大崎市 岩渕成紀さん（NPO田んぼ）
- ③ 福島県相馬市 新妻香織さん（相馬 はぜっ子倶楽部）

④ 栃木県 上三川 稲葉光國さん (民間稲作研究所)

休憩 11:35~11:50

3. 意見交換「地域の復興と湿地」 11:50~12:50

進行: 浅野正富さん(ラムネットJ事務局長)

コメンテーター: 菅波 完さん (高木基金事務局長)

4. まとめ 12:50~13:00

呉地正行さん (水田部会長)

終了 13:00

《 緊急集会 》

『東日本大震災 緊急報告会 地域の復興と湿地』

講演メモ (須川・西口)

《 プログラム 》 (録画を見た須川メモ; () 内・西口メモ; その他)

1. 挨拶 柏木実さん(ラムネットJ共同代表)

3月11日の地震の後で色々な事が変わってしまったが、亡くなった方への黙祷から始めます。

私たちラムサールネットは、湿地の観点から人間と私たちの生活についてずっと考え、各地の団体と連携しながら活動して来ました。

実は、今日の会合も元々は農業に関して、去年10月の生物多様性条約の採択国会議で決議された事柄をこの10年間どういうふうにしていくかについて考えていく為にこの4月に集まって話をしようと考えていたのですが、今回の震災で出てきた事が非常に大きな事で、私達としてはどこから手をつければ良いかを、もう一度最初から考えていかなければいけないのではと言う事で、私達が今まで現場でやってきた仲間たちの被害を聞いて、そこから私達が何をして行くべきなのかについて考えて行く事が出来れば良いな、と言う事で

この会を企画しました。特にこれまでやってきた湿地の保全と言う事と、違いはしないのだろうと思うが、そこをどうやって繋いで行けば良いかを話し合っていく事が出来ればと思います。

2. 報告 10:35~(2時間10分)

① 宮城県栗原市 呉地正行さん（ラムネット J 共同代表・日本雁を保護する会）

（錫萬商店の法被を着た呉地様。震災時は北海道から帰る機中、空から見た被災東北沿岸、倒壊した自宅と自宅付近の被災状況、復帰活動、支援感謝）

みなさん、おはようございます。ただいまご紹介に預かりました呉地といいます。私は、特に水田の湿地機能を生かして水と共生できる道を考えようという立ち位置から湿地に関わって来た。もっと辿るとガン（鳥類）の住める環境を全国に取り戻して行きたいという観点で、もう一度ガンの住める環境を全国に取り戻して行きたいと言う立場から湿地、特に水田に関わるようになって来た。水鳥と共存できる水田という事が立ち位置になる。今日の話は、私は一番震度が高かった栗原市に住んでいます。震災時は北海道にいた。テレビ等で震災情報が沢山流れてくるのですが、一番震度の高かった内陸部の情報が殆ど流れていないので、私の方からは特に私の自宅のある栗原市周辺の話をして頂きたい。

写真の風景は3月11日の朝の利尻で、前日10日に天塩川のシジミ漁業者や地元関係者などとオオヒシクイの生息地となっている天塩川の旧川でのオオヒシクイとシジミ漁の共存をどうして行くかを考えるために立ち上げた勉強会に参加し話し合いを行い、翌11日の朝、気分良く天塩町から稚内に向かっている時に撮影したものです（11日11:15）。その後13:15稚内空港発～15:10羽田空港着予定の全日空便に乗っていたのですが、宮城・福島県境あたりで予告なしに北へ進路変更しはじめて、辺りを旋回し出したのち、機長から大地震のため羽田空港が閉鎖されたというアナウンスがあり、3時間後、千歳空港に着陸した。機内のため地震の揺れは感じなかったが、そこではじめて想像以上の大地震があった事を知った。自宅との連絡が取れず、一番早く自宅へ戻るためにJRなどで変える方法を模索したが、翌12日になっても大津波警報のため全面運休となっていたため、再度千歳空港～羽田空港便で東京に向かった。丁度その飛行機が宮城県南部と福島県沿岸の被災地上空を通過した（12日11:00頃）。晴天で視界もよく阿武隈川河口・仙台空港や海岸線辺りの田んぼが津波にやられている様子が上空から確認できた。これらからただ事ではないなというのが分かった。その後、東京で足止めに会ったが、東京～新潟（上越新幹線）、新潟～仙台（バス）、仙台～自宅【（栗原市）友人自家用車】にて停電による暗黒の国道を通過して、15日に自宅にたどり着きました。途中で出会うのは自衛隊の車両ばかりで、これが現実なのかと思う反面、星がよく見えてこちら悪くないなとも思いました。

栗原市は宮城県の北部内陸部に位置し、津波は来ていないが被害の大きかった南三陸町・気仙沼までは丘陵を越えてすぐで、南にはラムサール条約湿地の伊豆沼・内沼、さらにその南には蕪栗沼がある。河川沿いの平坦な水田地帯の中に出来た町です。私の自宅は迫川（はさまがわ）流域に広がった町並みの中にあり、特に地震の被害がひどかった場所【（3月11日・震度7）（4月7日・震度6強）】。地震後に市の方で2回家屋調査をして危険度を立ち入り危険・注意・安全の三段階に分けた。自宅周辺の2度の地震に

よる被災状況は、全 57 世帯中 15 世帯 (26%) が安全、12 世帯 (21%) が要注意、30 世帯 (53%) が危険という結果でした。私の自宅も傾いてしまい危険で住めない為、斜め向かいの叔母さんの家 (空家) に避難しています。家の一階にはブルーシートが掛けられ、ブルーシート通りとなっています。自宅 (正確には奥さんの家) は元々米屋を手広くやっていたのですが、築 100 年と言う事で必要に迫られ家の解体をしていたらハッピーが出てきたので、本日着てきたと言う訳です。(背中に屋号のモト入っている。)

敷地内にはいくつか建物があり内 7 つを解体の為には敷地内の荷物を全て出さなければいけないので、ここ 1 ヶ月間は行動範囲が数キロの生活をしている。周辺住居の状況としては、特に瓦屋根の住居、古い住居、土蔵などが大きい被害を受けた。瓦を使った家の被害が大きいように感じた。地盤が余り良くないので地盤沈下もかなり起こっている (マンホール・墓など)。千葉・ドイツ・韓国・本日の参加者ほか多数の方々から復帰に向けた、片付け・チャリティコンサート・食料援助など、沢山の支援を頂き感謝します。

② 宮城県大崎市 岩渕成紀さん (NPO 田んぼ)

(大崎市 2 週間インフラ復帰後、海岸津波被害地の支援、自然を生かした復興のイメージ図)

(柏木さんによる紹介：岩渕さんは高校の先生をされた後、NPO 法人田んぼというところで農業にも携わっていらっしゃいます。) 岩渕です。よろしくお願いします。

私は現在、約 100 団体以上からなるレスキュー災害支援センターの石巻から北は大船渡 (岩手辺り) まで南三陸を中心にカバーしているサテライトステーションがどんどん機能して行くように私達が何を出来るかと言う事を考えています。NPO 法人田んぼは 4 人体制なのでその中で最大限に出来ることをしましょうと言う事です。最初の 2 週間位は、自分の事が精一杯で、水も出なかったのも、お百姓の家にリヤカーで井戸の水を頂きに行き、電気も 2 週間くらい止まり、インフラ・電話・インターネットも駄目だったので、ようやく先週辺り回復して来ました。2 週間たった辺りから色々な事をきっかけに居てもたっても居られなくなって南三陸町の様子を見に行った。

防波堤も途中で破壊されていました。土台だけになっている家もかなりありました。呆然と我が家を眺めている人もいました。上流 5 キロのこんな場所にも水が来るのか、という場所にも爪痕が残っていた。かなり高い建物でも全滅していた。50cm~1m の違いで無事か否かの明暗を分けていたようです。お医者さんから聞いた話によれば、外科と内科のお医者さんが多数行ったのですが、怪我をしている人が全く居なかったのです。病院では薬品があっても、注射針がすぐに見つからないとか、体育館などで衣類などの物資はあってもすぐに出せない、気付かないなど、現地でのマッチングが出来ていないといった印象も受けました。それらをどういう風に解決すれば良いか、というのが市民団体として私達が出来る最も重要な事だと考えている。

見たところ人災的な要素も見受けられます。南三陸町より北に向かう一帯は防波堤が全て破壊されてしまっていました。国道 45 号線もズタズタでした。農家の人も田んぼの前で立ち尽くしていて、今、何が必要ですかと聞くと、私達は百姓だ、耕したい、貰って生活するには慣れていない、寝てるのなんて嫌だと言われたのです。電柱もねじれていました。ある場所は 16m の津波で、こちらも僅かの差が明暗を分けていたようです。石巻は波がジワジワと上がってきた模様で、家は余り破壊されていないのですが、やはり被害は大きく、大川小学校が特にひどかったようです (75% の児童が亡くなった)。この場合は、堤防沿いを歩いてしまったと言う事で、避難指示ミスのような感じもしました。陥没していて、雨が降ると海になってしまう場所もありました。子供たちも自分たちでチラシ・ボランティア団体を作って、自転車で支援をしようと計画していましたが、届ける手段がないので、私の所に相談しに来ていました。避難所でも 100 人以上の大きな場所には物資が余っているが、50 人以下の少ない場所や、避難所にいけない人には全然無いなどの、被災者マイノリティが起こっていたので、これらの支給をスムーズに行えるようにしました。整理棚などは、中々来ないので、自分たちで作るようにしました。公共機関などのバスで来るなら要らないとも言われたので、自分たちで単身現れて、ボランティア床屋をやったら感謝されました。高校生なども加わって様々な 7 つの復興プロジェクトを考えて実施しました。昨日から、かねてから計画していたのですが、中断していたふゆみずたんぼを再開しました。塩分調査など土の調査を行いました。田んぼにはガラスがありましたが、マルタニシが生きていた。ヒル、ヒメアメンボも来ていたので塩分も抜けているのでは、と感じました。これらの生き物がどうやって来るのかという調査も世界ではじめてとなる。種まきも行った (昨年からはじめた究極の一本植え)。田んぼや生物だけが汚染物質を除くのであれば、浄化しているのは誰か、というのを最も考えなければならぬ。それを支えていたのがお百姓であると考えれば、今まで通り農業を行うことが大事だと思います。全ての放射性物質を除いてくれるために存在していたのではないか？ と思います。子供たちが生きていけるような場所を私達はどうやって作って行くかと言うことです (子供たちと生き物が対話出来るような)。もう一つは 25% の避難民が仮設住宅には入りたくないと言っている。これは、東北人 (特に年配の人) が都会的な住居には耐えられない性質と関係があるみたいです。今後どのような家を作っていくか？ 例：雨水・雪・小川・潮の動き・堆肥・生物多様性等を利用すること。

他は税金に頼らない復興支援 (東北サイコウ銀行プロジェクト)。これらを含む、7 つのプロジェクトで世界観が変わると期待して、そこを目指したらどうか？ と皆さんに提案します。

③ 福島県相馬市 新妻香織さん (NPO 相馬はぜっ子倶楽部)

(相馬市 2 番目に大きい街が消えた(実家がある)、ラムサール条約登録をめざしていた松川浦(砂州の内側)、自宅のすぐ前まで津波がきた。明治の干拓前の風景に戻った、リセットされた、あらたなビジョンで復興を)

(柏木さんによる紹介：新妻さんは松川浦の他に、アフリカの支援活動も行っておられます。)

はぜっこ倶楽部の代表をやっている新妻香織と申します。よろしくお願ひ致します。

私達は 2000 年から松川浦で活動していましたが、松川浦はどういうところか、と言う事からお話したいと思います。松川浦は砂州がずっとのびてきたラグーン【潟湖(せきこ)】でした。約 700ha で東北最大の干潟である。長さ 7km、最大幅 1.5km、面積 738ha、最深部の深さ 5.5m、相馬市で 2 番目に大きい住宅密集地が隣に面していた。

ラムサール条約の生態保護地にもなっていて、ラムサールの活動も行っていったような、美しい生き物の楽園でした。福島県の県立自然公園、鳥獣保護区・狩猟禁止区にもなっていた。砂州の所は本当に白砂青松といってもいい位、真直ぐな砂州が渚 100 選、日本 100 景に選ばれました。緑地帯は国と市の保安林にもなっています。

あの日以来、私はボランティアに走り回っていて、余り資料が揃っていないので、COP10 での資料をお見せします。現場での写真は余り撮っていないです。干潟の現れる場所で県・国の絶滅危惧種が合計 66 種存在して、福島県では尾瀬に次ぐ絶滅危惧のホットスポットと言われていました。仙台湾の一番南に位置する、東北最大の干潟でした。

ヒヌマイトトンボ、オオイチモンジゲンゴロウ等の絶滅危惧種がいました。底生生物も新種が見つかるような、東北で生物多様性の一番高い干潟でした。秋から春にかけては海苔の養殖の風景が美しく、観光客が蟹を食べに訪れ、夏は海水浴にと、福島県でも有名な観光地でした。

そんな生き物の楽園松川浦は、3 月 11 日の震災で千年に一度の攪乱に見舞われてしまった。この日私は、自宅兼 NPO 事務所にいました。ハンパな揺れではなく、自宅が南相馬市の職員が一人居て、家に帰ってしまった事を後悔したが、職員は幸い無事でした。我が家は海拔 15m 位だったので大丈夫だと思っていたのです。津波の到着まで 30 分位あったので周りは余り津波が来るとは思っていなかったようでした。お茶を飲みながらテレビを見てみると、釜石その他の辺りは物凄い事になっていたのも、これは大変な事だと分かった。窓の外を見ると松川浦は全て水が引いていて、海水浴場の辺りは晴れにもかかわらず水煙で何も見えなくなっていた。家の前の谷の所まで家が流されて来たが、この音は今も忘れられないです。我が家は大丈夫だったが、隣の家が、流されてきた瓦礫に押されて少し壊れた。故郷の町が消えた。家族・家・船を失った。私は同級生やその家族などが亡くなってしまった。私の家の 2 軒先まで瓦礫で埋もれていたのも、危険と感じてもう少し高い公民館の方へ移動した。松川浦は日本有数の底引き網漁の港

があったが、9割の船が失われた。子供なども何とか公民館に避難させて、電気の要らないストーブ、すぐ食べられる食べ物などを持ち寄り少し明かりをつけ、ラジオを聴きながら、自衛隊の到着を待った。

22:00頃に自衛隊が来て、水を貰い、町の中心部へ避難した。私の町は市で2番目に大きな地区だったので、バスで早めに避難出来たのです。幸い相馬市は市の中心部が壊滅的な被害を受けなかったので、スムーズに避難出来た。呉地さんもおっしゃってましたが、憎らしいほど綺麗な星空だった。私の実家は片付けるものが無いぐらい何も無くなってしまった。浜は何も無くなって更地になっている。エチオピア関係のツリーハウスは残った。4月20日に震災以来初めて学者や専門家らと松川浦に入る。地震後の航空写真を元にして見てみると松林は一本も松が無くヨシ原、ヒヌマイトンボの湿地等も殆ど壊滅状態だった。汽水域のトンボも居なくなってしまった。自然の家があったが、保安林の松が覆い被さってしまった。瓦礫の撤去も遅れており撤去出来ていなかった。塩性湿地も陥没してしまった。とにかく、干潟も砂浜もアマモ場もヨシ原もすべてやられて、生き物の気配が全くなかった。続いてこちらは明治21年の松川浦の古地図です。今回の津波でこの地図の景色に戻った。現在の浦口は明治43年開削（現在は橋になっている）。色々な浦があり、干拓して田んぼにしていたが、津波で明治の景色に戻った（リセット）。

私たちは、新たな価値観で行き始めなければならない。エネルギー問題、暮らし方、家族、コミュニティ、私たちはどうあるべきなんだろう。はじめ公民館に避難した時点ではまだ笑っていたが、翌日の原発事故以降笑うことも出来なくなった。福島は、立ち上がれない位の打撃を受けた。とにかく宮城県と岩手県は早く復興して、復興モデルを作ってください。福島はついて行きます。前福島県知事は、原発に何かあれば福島全体が駄目になると言う事で、以前の東電データ捏造事件で原発を16基止めたが、東京は夏であるにもかかわらずネオンもつき、電車も動いていました。なのになぜ、今回は大騒ぎしているのかと思いました。計画停電なんて犯罪的だと思います。

消灯の仕方なんてエチオピアより間抜けです。なぜあんな東京電力の様な一企業が、病院の電気まで消す権限があるのか？と私は言いたいです。まあとにかくリセットされたので、みんなもう一度どう生きればいいのかを考え直すいい機会を貰ったんだと思います。福島の人達は忍耐強いから、私たちが犠牲になったんだって、みんな言ってますよ。同じ事を繰り返さないで欲しいと思っています。東電は、何度爆発させれば済むのか、こんな事は福島だけでいいと私は思っています。福島は耐えますけど、みなさんや東電は同じ事をやっちゃいけないんです！自然の家では、潮につかりながらもヤマザクラが咲いていました。松川浦もかすかに生き物の気配があった。この凄まじい千年に一度の攪乱を通り抜けた生き物たちだけが新しい生態系を作ると思っています。はじめは気配が無かったが20日に行ってみたらカニ達が巣穴を作っていた。

牡蠣礁は別の場所に移動していた。ヨシも新しい芽を出していたので、ヨシ原は復元

するでしょう。泥掻きにいった掘り炬燵の中から 38 日ぶりにヤマトオサガニが 2 匹生きたまま救出された。復興のシンボルと私たちは言っている。決して絶望しない、希望を植えよう。今後観察を続け生き物を記録して行こうと言っています。私が 3 年前に市民と作った「まるごと松川浦」という雑誌を私の所に届いた見舞金で買い取って、家や全てを失ってしまった人に配っています。こちらに楽園（松川浦）の様子が載っています（お店や大好きだった場所など）。写真が無くなってしまった人には大切な持ち物になっています。このガイドブックが美しい記憶になってしまわないよう、みんなで力を合わせていきましょうと松川浦の人に呼びかけている。チラシをお配りしましたが、相馬市は仮説の入居が始まるので市民に呼びかけて生活物資を集めています。みなさんも要らないものがありましたらチラシの住所に送って下さい。長くなりましたが私の話は以上です。ありがとうございました。

④ 栃木県 上三川 稲葉光國さん（民間稲作研究所）

ただいまご紹介頂きました、民間稲作研究所の稲葉と申します。

私ども、研究所の名前からわかるようにイネ・麦・大豆という主穀作物の有機栽培を研究・開発している団体です。昨年の生物多様性条約締約国会議では近代農業は生物の多様性を非常に大きく削いでいるということ、特に農薬が問題だということで、今年の 3 月 10 日までは、ネオニコチノイド系農薬が農村の生き物達に非常に大きな影響を与え、スズメ・トンボがいなくなると、極めて顕著な変化が出ておりますので、その特集を組んで、講演会あるいは研究出版などの活動をしていました。こちらに詳しく載っておりますので、もし、ご覧になられた方がいらっしゃいましたら見ていただければと思います。こういった活動をしていましたが、3 月 11 日原発の事故によって事態はがらっと変わってしまいました。ネオニコチノイド系農薬も近代化学の粋を凝らした新しい最終農薬で害虫には効くが人間には安全と言われてきた物ですが、原発の方も、安全神話を植えつけられてきた近代科学技術の象徴的存在ではなかったかなと思うのですが、その 2 つが、非常に大きな災禍を我々にもたらしました。

私どもの研究会員の農家の方々が福島原発の 30 km 圏内に 26 名いらっしゃいます。で、ご覧のように今年全く作付けが出来なくなりました。作付けを禁止されてしまいました。玄米への移行係数が 0.1% という根拠に基づき 5000 ベクレルを超える土壤汚染があった所では、暫定基準値の 500 ベクレルを超える恐れがあるので、作付けを禁止するという形を政府は取りました。現地の人たちは 5000 ベクレルを越える場所というのは、全部が全部そうではないのですが、一応 30 km 圏内、それから計画的避難区域は全部作付けを今年してはならないという決定になってしまった。それを受けざるを得ないという風な状況と、2 重・3 重・4 重の被害を受けた方がこの地域にございました。

特に国道 6 号線の東側の地域に 4 名程の農家の方がいらっしゃいましたが、完全に家も田畑も全くなくなってしまった、そういう状況です。特に海岸に近い所ほど、津波の

勢いが強く、全く何も無い更地の状態で、奥の方に行けば行くほど、瓦礫の山という状況で、その撤去作業が非常に大変だという状況になって来ています。一番ひどいのは20km圏内の人たちで、津波もある、原発の被害も受けてしまったので、撤去をすることも出来ない、行方不明になった方—私どもの会員の方にも一人いらっしゃいます。奥さんとお孫さんを亡くしてしまいました。—しかし、行方不明のまま今日まで至っています、というのは、現地に立ち入れない、捜査が出来ないままと言う事で依然として行方不明というような大変悲しい現実を強いられている状況です。面積にしますと、約58ha が会員の方だけでも作付けの出来ない状況で、生産総量にしますと、大体250tの有機農産物（有機米）が生産できない状況になっています。有機農産物をご承知のように、3年以上経過しないと認定を頂けない大変厳しい基準をクリアしたお米です。これを他の県での一般農家では代替できない。有機農家しか出来ないのもその人たちに呼びかけてなんとかバックアップ体制を取りましょうという話をしましたが、もう既にイネ作りの準備は終わりかけているそういう状況の中の話で対応しきれない。全国的に見てもイネの作付の時期と重なった為に出来ない面積は相当数に上る。生産調整で4割位作付をしていない部分の一部を緩和処置をすると言う事を、農水大臣はアナウンスすべきではないか、と言う事を3月の段階で申し上げて来たのですが、なかなか十分に行っていない状況です。県間調整という形で、他の県で増産しようという計画があるが、なかなか実現しない状況で、今年の秋を迎えようとしています。おそらくコメが全体として不足する状況になるのではと、言う気もしています。平成5年米パニックが起きた時にも青刈りをしてコメの減産を断行してきました。絶対その様な事があってはならないと、申入れはしていますが、同じことの繰り返しになりそうな心配がしています。これを契機にTPPに一気に加盟すると言う目論みもあるという気がしています。

私も、再建の可能性を探るために現地を見なければということで、被災後の会員の人達をたずねて、いわき市から国道399号線を北上して、20km圏内をかすめ北上しました。被災された農家の方の多くが南相馬市にいますので訪ねました。地盤が沈下して、未だに田んぼは水面の下、20km圏内は捜索にも入れず、町全体死臭が漂う悲しい現実を目の当たりにして来ました。私どもも警察官には止められますが、自己責任だといえればその時は入ることが出来ました。空き家の連なる中、犬だけが元気という大変厳しい状況でした。放射線の測定器をポケットに入れ、測定しながら行きましたが、汚染は非常に局地的に高くなる場所がありました。(4月)7日には最大の余震があり、6強で大変な恐怖を感じました。南相馬市の原町区で有機稲作を実践しているかたのうち3名の方が津波に会い、完全に流出してしまって何も無い状態でした。本当に悔しい話です。学校には新学期の筈ですが、人っ子一人いませんでした。

相馬にある東北電力・東京電力共同運営の火力発電所では、木質チップを石炭に一部混ぜて燃料にする試みを始めようとしていました。これからのエネルギー問題は、原発ではなく、火力・水力・風力・地熱は様々な可能性を持っているが、私は、火力発電は

非常に有力な手段の一つという気がしています。調べてみますと、相馬の火力発電所の集塵機は残念ながら放射能を吸着できない電気集塵機でした。大変な量の瓦礫を燃さなければならぬので（大変な量の流木）、ダイオキシン・放射性物質を含んでいるのでセシウムを外に出してしまう恐れがあるという気がしています。これらを外に出さない集塵機はセラミックを使ったバグフィルターであれば、出さないで済むと、東電の関係者から聞きました。新しいタイプの火力発電所として生まれ変わることが必要だと言う気がしています。取り掛かるいいチャンスだと、これらを見ながら思っています。

栃木・茨城・福島放射能の汚染状況は、原町の少し手前で極端な数値が出ていました（20 マイクロシーベルト）。自分の家では6時間程で1 マイクロシーベルト蓄積する量ですが、ここは5・6分で蓄積するので、測定していて怖くなってしまい、息もせず逃げて来ました。原町はそれほどでもなくて、飯館になるとまた極端に数値が上がりました。まさにピンポイント的な汚染の高さということが、この後報道されるようになってきたと思います。初め、半径20~30km圏内といわれていましたが、そうではなく、これは、風向き・地形で局地的であることがはっきりして来たのだと思います。チェルノブイリでも同じような事があって、日本でも厳正に測定していくことが必要だと言う事です。

福島だけではなくて、実は茨城・栃木の土壌の測定結果からみても、距離とは直接関係なくて、かなり離れた場所でも濃度が高くなっています。龍ヶ崎市水田では、496 ベクレルという数字が出ている。龍ヶ崎は、田んぼ全体、用水路がズタズタになって、作付が出来ない状況に追い込まれた場所で、2重被害になってしまいました。日光・那須塩原などでも非常に高い数字が出ていました。これらの情報はインターネットでも分かるので今年の連休には、観光客が激減してしまい、危機的な状況です。本当に風評被害が厳しいですね。セシウムの分析をもう少し詳しく見ると、生協さんが調べた数値と公的機関が調べた数値がかなり違っていたのですが、これは生協さんが表土5cmと公的機関が15cmで測定していたからでした（セシウムは表面だけに溜まる）。

これは私達が有機の種子を生産していた田んぼの数値で、994ベクレルと・かなり厳しい状況です。食品衛生法により、ヨウ素は2000ベクレル、セシウムは5000ベクレルで出荷停止になります（コメの場合）。ハウレンソウが出荷停止になりました。150kmはなれた場所でも影響を与えています。私達の測定した圃場は、15年間農薬も化学肥料も一切使用したことがなく、カメムシが一度も発生したことがない田んぼです。東側の林はカメムシの越冬に絶好の環境であるが、一切つかない。それは何故かという生物の多様性です。（特にクモ・カエル）クモが多く縄張りを主張しているのでカメムシが入って来られない。これは他の（有機圃場）を調べても同じ傾向にあって、農薬を使う田んぼよりもカメムシがずっと少ない。それが真実ですが近代科学は認めようとしない。そして最終農薬のネオニコチノイド（哺乳類には効かないが、昆虫には猛烈に効く）がカメムシ防除のためにばら撒かれています。その結果、生物の多様性を大幅に

縮小している。人間にも被害が及び、特に子供達が危険に晒されている事が科学的にも明らかになってきています。

さて、原発がそのまま収まってくれれば、これからは汚染されてしまった大地を、どのようにクリーンにして行くか、すぐに取り掛かるべき状況に来ていると思います。特にすぐ麦の収穫をはじめなければなりません。手作りの地ビールも今回が最後で2~3年は世に出す事はできないのではないかと恐れています。放射能汚染は非常に長い期間ジワジワと打撃を与えており非常に深刻です（風評被害も含めて経営が成り立たない）。汚染した麦稈を回収して乾燥させて取っておこうと考えています（すき込む訳にはいかない）。この後どうするか？今までは大豆を作っていました。米・麦以上に大豆はセシウムを吸収します（トウモロコシ・ヒマワリの比ではない）。今年は販売できません（来年以降も）。ここでどうするかお味噌屋さんお醤油屋さんはどうなのか？来年も提供できないと考えています。

作付をする事も出来ないで、保証金で生活していると農家は駄目になってしまいますので、見方を変える必要がある、そうすると逆に考えて、大豆は、セシウム吸収作物として最も優れた作物と言えるのではないかという事になる（汚染度の高い作物ほど放射性物質の吸収に優れた農作物という位置づけをしていく必要がある）。つまり、大豆はセシウムを回収する油脂作物であるということです。しかも油にはセシウムは移動しない。国産の植物油として生産販売し、使用後は新しいエネルギー源にする展開を。麦わらを近くの火力発電兼ごみ焼却場で使用し、火力発電の燃料に。汚染された草木も全部刈り取って火力発電の燃料として焼却処分（もちろん、いずれもセシウムが出ないバグフィルターを整備した施設）する。セシウムを含んだ焼却灰は、熔融スラグにする技術があるので、最終的には、放射性物質を低濃度に含んだスラグとして処理を行う。こういう仕組みを作れば、かなり速いスピードで土壌の汚染が解消されて行くのではないかと、言うことです。

その第一歩として緊急提言を出しました。飯館村など非常に大きな汚染に見舞われ、作付が出来ずにいる農家の人たちにとって補助金で生活するという事ほど惨めなことではない。視点を変えて、おコメが駄目なら、1万5千ベクレルを超えるような、立ち入り出来ない場所に生える雑草を刈り払って焼却処分にし、土壌のセシウムを減少させる。そういう形での対応をしないと、いつまでも残る。そんな技術を持っているのは日本しかない。そのような形で提言させていただきました。ご賛同いただければ、あちこちのメールで発信をよろしく申し上げます（世論としてそういう事を真剣に考えようよ、いう方向に持って行きたい）。そのような考えに基づいて「大豆・ひまわり・なのはなプロジェクト」を立ち上げました。（チラシを見て下さい）。ぜひご支援ください。汚染をなるべく解消して地域農業の再建につなげていく為に、汚染程度によって作付体系を変えていけばよいと思っています。

①1万ベクレルを超える人間が立ち入ることさえ危険な場所、本来何の作物も作付はで

きない、雑草が生えるに任せるほかないが、そこに生える雑草は極めてセシウムの吸収能力に優れた雑草が生える。それはアカザ・シロザが主力だそうです。これが広島の原因爆の後に最初に生えた雑草だそうです。沢山のセシウム・ストロンチウムを吸収する性質を持っています。その後ナタネを植える→夏作物にヒマワリまたは大豆→再度ナタネ→イネを作付する。これらの取り組みによってセシウムの基準値が下がれば良い。人類初の試みで仮定の話なので、研究者がきっちり付いて放射線の推移をトレースする必要があります。トレースの結果は、世界の遺産になると思います。沢山の原発が日本にはまだまだあるので、同じ事を繰り返すかもしれないので、国民全体で考えて、対応していかなければいけない性質のものです。福島原発で終わりではなく、今後もありうることで

②350～5000 ベクレル以上の場所。イネを作れないので大豆→ナタネ→イネを作付する形で除染が出来ないか？

③350ベクレル以下の場所では、イネ→ナタネを作付（栃木県ではもう既にイネの作付が始まっていて、禁止になっていない）。収穫の段階のチェックで駄目だったものはどうするか？全部このまま放置するのか？補償金だけ貰えばそれでいいのか？今の行政の対応はハウレンソウの出荷停止の指示をしたまま何もしていない。農家の人達はどうすれば良いか分からない。次の作物を作ることも出来ない。仕方がないので、端っこに寄せておく。政府からは、焼却不可の指示が出ているので、何も出来ずに野ざらしになっている現状です。今の日本の技術でいけば焼却、発酵の2種類の方法がある。なのはなひまわりプロジェクトでは、油の絞り粕は発酵の方でヴィジョンをまとめているが、茎葉については、とても処理し切れないので（膨大な時間もかかる）。焼却処分を考えています。焼却であれば早く処理ができる。外部にセシウムが出なければ良い。回収した灰を溶融してスラグにしまえば、かなりの量が処理できるので、そういう方向性で考えていく必要がある。っそれには収穫の方法を工夫していく必要があると思っています。

汎用コンバインを用いて収穫し、子実の放射線を測定したあとに、可能であれば、食用又はディーゼルエンジン用に活用。茎・葉・はホールクロップという梱包（ラッピング）して取っておく技術があるので、これを少しずつ火力発電所の燃料に活用したのち（村に一つの小規模火力発電）、灰を溶融してスラグにして福島原発にもどすという処理です。今回は大変な災いですが、これを福となす知恵を皆さんと一緒に考えて、日本で出来る技術があるんだという事で前に向かって進みたいと思います。ありがとうございました。

以上